

研究者と保育者とのあいだ

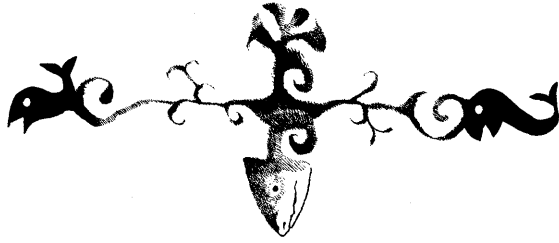
—古い記録を取り出して読む—

津守 真

関心がないようにみえても、子どもは大人の存在を感じている

昭和四十五年当時、私は週一日だけ保育の現場（母子愛育会家庭指導グループ）に出ていた。

園庭の外から垣根をへだてて庭を見ると、子どもがふたりいた。私はしばらく見ていて、園庭に入ろうかどうしようかと迷った。Tくんは木片をまっすぐに動かして地面に線をつくっていた。私のほうを振り向きもしない。私が庭の内に入ってもこちらを見ない。しかし、私はここまで来て、もう一步踏み込まないのはいけないような気



がして、そこにしゃがんでいた。

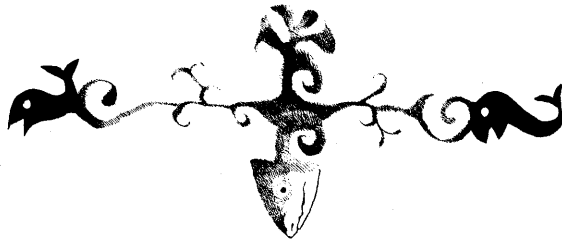
Tくんは庭の中央に近いブランコから、出口まで木片を動かし、二度ほど往復した後、しゃがんでいる私を見てにつこり笑った。私は「長い線路だなあ」と言ったら、私の膝に座りに来た。まもなく自分からおりて、また木片で地面に線をひきはじめた。

子どもは私を見たときから、なにも話さず、近寄ってこなくとも、私の存在を感じていたことが分かる。私はそこに留まってよかったと思った。もしも、この子は私に関心がないからと思つて去っていたら、遊んでいた大人が突然いなくなるのと同じくらい、私はこの子を裏切ったことになる。Tくんはその後もずっとそれをつづけていたが、私が砂場でもうひとりのIくんを相手にしはじめてからは、線路が庭を横切つて私のいる砂場の方に向かつてきた。一時間ほどして、弁当になったとき、私は、「T君の自動車はお弁当ゆきにしてください」と言うと、自然に保育室に入った。

子ども自身がどうしてよいかわからないとき

もうひとりのIくんは砂場の近くで泣き顔で、自分の頭をたたいてひっくりかえっていた。

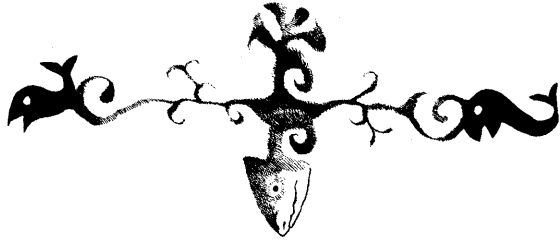
人はどうしてよいかわからないとき、自分の頭をたたき、自分のことを「ばかやろ



う」と言つて自嘲する。おとなにもどうしてよいかわからないことが沢山ある。そのときは、Iくんはこれに近い思いだったのではないか。Iくんのその前の状況を私は全く見ていない。しかし、ことばを話さないIくんには、どうしてよいかわからぬときが、一杯あるに違いない。砂場にはTくん、Iくんなど、三、四歳の子ども数人が一緒にいた瞬間があつた。私はどうしてよいかわからぬ問題をたくさんかかえた男たちの集まりを感じた。私も分からぬ問題をかかえた人間のひとりである。すべてわかつた世界にいる人などこの世にはいない。分かつたように思つても、実はその内側にもう一歩いれば自分自身の当面する問題と格闘している。保育実践者は、それを未来に開くのを助ける人のことである（その場において私はこんなことを考えていた）。

Iくんは弁当のとき、私が部屋に入つたらついでに入ってきた。すでに弁当にいく気分だつたのだと思う。でも食卓にはつかずに入つて入つてきた。こういう行動を、そのときだけを見て、「弁当なのにふらふらして席につかない」と決めてしまつたら間違ひである。Iくんの行動の前後をみていれば、この子は食事にゆく気分になつていたことが分かるし、その気分を行動にあらわすのがむつかしくてこの子は困つているのだと言えるだろう。Iくんはこの日はもはや自分の頭を叩くことはしなかつた。

この頃、母親たちに、かわるがわる保育に参加してもらつていた。Iくんの母が保育室に入つていた。午後になつて私は母親たちと話し合いの時間をもつた。



Iくん母「先生のお手伝いをしようとだけ考えていたんです。保育室に入る前にはどういう子どもさんか分からなかったけれど、いろいろな子どもさんがいることがわかり、どの子どもも可愛いって思いました。とつても可愛いと思えました。Tくんは歌がうたえるんですね。」

私「Iくんは自分でもどうしていいかわからないことがたくさんあるんだけど、きっと、分かりかけてきたことがあるんですね」と今日の私の体験を話した。「弁当のとき、食卓の傍まで来ても食卓に向かうことはしないで、うろろろしているのは、きっと、どうしてよいか分からないでしょう。一緒にやっているうちにだんだんはつきりしてくるのでしょう。私たちにも、子ども自身にも。」

私はT君についても、私の今日の体験を話した。

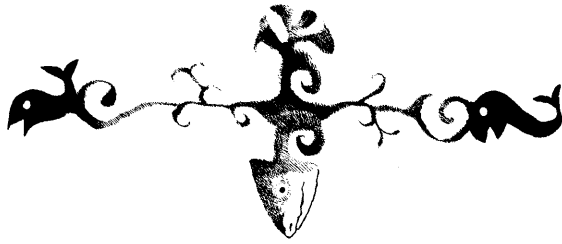
私「T君は、知らん顔していても、他人を気にしているのではないのでしょうか。」

Tくん母「私はそんなことは気付きませんでしたけど。でも、家でテレビを見ているとき、見ていないと思つて消したら、とても怒つたんです。」

私「T君は他人に関心がないのではなくて、もしかしたらとても気にしているのかもしれない。そう思つて見たらどうか。やつてごらんなさい。」

(一九七一年一月十九日)

週一日だけ保育の現場にゆく人には、遠慮やためらいがある。他の日のことは知ら



ないで何がわかるのかというひけめもある。その謙虚さは必要だが、心身を集中させて子どもと交わった貴重なひとときは、保育者の原点であると思う。一日をしつかりと付き合ったときには、自信をもって保育と子どものことを語ってよい。それは専門家だからではなくて、子どもと率直に人間として付き合ったからである。

付

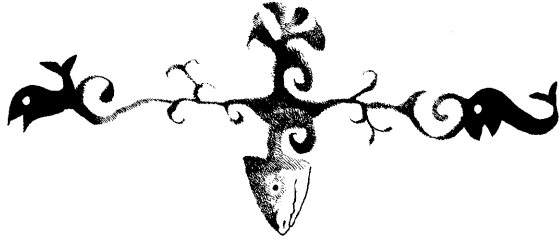
前月の母親懇談会（一九七〇年十二月十日）では次のような話題で話が進んだ。その頃の親たちの悩みを反映していると思うので次に記しておく。

母A「保育にはいる前はもっとしつけをしてもらいたいと思っていたが、（一緒にかわってみて）ここでもっとたいせつなものが育っていることが分かりました。」

母B「うちの子は自閉症って言われたんです。だから自閉症の治療をしたほうがいいんじゃないかと思つて。いろいろ読んでそうだと思います。専門病院に行つたんです。そうしたら、入院させたほうがいいといわれて、はじめはどきつとしたんです。

病院の先生は、ここでは軽症で治る見込みのある人しか入院させないと言われました。」

私は、入院はよくないこと、それは、家庭でやってゆかれない事情ができたときだけ



であることを説明。

母B「私もそう思っていたんです。だけど軽いうちに入院させたほうがいいって。」

私「あなたの子どもさんは入院させたことでもっとショックをうけるでしょう。」

母C「うちも自閉症と言われました。ここで先生がひとりついて公園に行くのもそれと関係があるのでしょうか」（私はそんなことは考えてもいなかった。）

母Dが、あらたまって言った。「先生にお話ししたいんですけど。先生が子どもを見ていらして、もしも母親のせいではないかと思われることがあつたら、皆の前では言いにくいことであれば、ひとりずつ面接して言ってくださいませんか。」

私「かりに自閉症としても特別な教育はないんです。この子のことを考えて、日々子どもに答えて保育をすることが必要なんで、自閉症の教育が必要なのではないのです。」

母E「うちの子はいつも空中に手をかざして振る癖があり、自閉症の症状だと言われました。」

別の専門から見たら〇〇症と診断されたとしても、保育者は、どの子ども例外なしに、悩みや願いをもつ一人の子どもとして見て交わる。いま、そのことが一層はつきりとわかる――